

ニワトリの獣医師と呼ばれたくて 終

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

新たな挑戦

「学位取得にチャレンジしてみないか？」

農場を巡回した帰りの車中で、ドクターKが話を切り出した。

「学位：ですか？？」

正直なところ、筆者は学位という言葉に即座に反応できなかった。あれこれ話しているうちに、学位＝博士であることが頭の中でやっとながるという有様だ。少しまでも神経の持ち主であれば、ドクターKからいただいた大変光栄な提案に感激したのだろうが、瞬間的に理解できなかった。

一般に、大学では学部（四年間）を終了すると学士。大学院のうち、修士過程の二年間を終了すると修士。さらに、博士過程（三年～四年間）を終了すると博士という仕組みである。しかし獣医学の場合、昭和五十三年以降、大学での獣医学教育が六年間に設定・移行された。そのため進学を希望する場合は、直接、博士過程に進学するというシステムに変化した。ちなみに、このシステムは医学部と同じである。

獣医師の免許を取るために六年間

も大学に通った上に、さらに最短で四年。都合、少なくとも十年間は大学に行くことになる。しかも、博士課程を修了するには研究成果が科学雑誌に掲載されることなどのハードルをクリアしなければならず、四年間で過程を終了できる保証はない。順調に卒業したとしても二十八歳。

極めて優秀な研究成果を挙げた場合には三年で終了することはあるが、それでも二十七歳である。

こうなると、まず女子学生は年齢の問題で二の足を踏む。男子学生でも親のすねをかじって大学に行くにも限度があるから、将来、大学に残って研究したいなど研究者の道を希望する学生が進むことが多い。

まして、学費を自ら捻出せねばならなかった筆者には、頭の隅にも『進学』という文字はインプットされていなかった。

したがって、ドクターKから学位取得のチャンスをいただいた時、『寝耳に水』の状態であったことは言うまでもない。加えて、お世辞にも優

秀であると言えない筆者が、博士号にチャレンジする身分であろうか？といった気持ちで脳全体を占めた。

「私でもよいのでしょうか？」

筆者の問いに、ドクターKは静かに答えた。

「こうなりたいと思いつけて努力を重ねていけば、必ず成し遂げられるはずだ」続いて「君の友人でも博士課程に進学した連中がいただろう。彼らと比べて君は決定的に劣るのかい？」

そういえば、筆者の同期生の中にも、就職する代わりに母校の岐阜大に設置された博士課程はもちろんのこと、東京大や北海道大の博士過程に進学した輩がいたことを思い出した。優劣はともかく、確かに天と地ほどの差はないと感じた。

冷静になって考えると、就職してからというものの、自分の人生に、徐々に光が差し込んでくるのが見えるようになってきた。また、できるだけ前向きな気持ちを持ち続けることが幸運を呼び込み自分を成長させると、かすかにわかりかけたところだった。

こうなれば、答えは一つだ。「是非、チャレンジさせて下さい」

——こうして、筆者の人生の新たな挑戦が始まった。

一足の内らじ

挑戦したいとは言ったものの、具体的に何をどうすればよいかわからない。今まで頭の片隅にも存在しなかったことだから、当然の成り行きであった。

手続き上の話で言えば、①大学院の博士課程に入学して研究を重ねるルート、②しかるべき科学雑誌に公表された自分の研究論文を審査してもらおうルートがあるのだが、筆者は博士課程に入学する道を薦められた。「どこの大学院がベストでしょうか？」

「鳥取大のO教授という先生がいてね。日本の大学で鶏病の研究分野では第一人者の…」

「存じ上げてます」。ドクターKの話の途中で、反射的に筆者は応えた。

「えっ!! 知っているのかい?」
「ええ、子供の頃からオヤジや養鶏場の社長から伝染性気管支炎（IB）の研究で有名だと耳にタコがでるぐらい聞いていましたし:」
それから学部の六年の時に、インフル

エンザウイルスを分離したときに、O教授の研究室に勉強に行きました。甘酸っぱい記憶を少し思い出し、筆者は照れながら話した。
「それは、それは奇遇だね。世間は狭いものだね」

「ハイ」
「逆の発想をすれば、層が薄いとも言えるよ。努力すれば、鶏病の分野で日本で一番の研究者になれるかも:」

常にスケールの大きな発想をするドクターKであった。
「具体的に、どういったペースでO教授の研究室で何を研究すべきなのでしょう?」

「必須の講義や面接などを除けば、研究テーマや研究ペースは、うちのラボに一任してくださいさるそう。年に数回は鳥取に通わなければならぬが、メールやFAXでコミュニケーションすることです承りたいだよ」とドクターK。

「本当ですか?」
おぼろげながら、自分が為さねば

ならないことが見えて安心した。それにしても、研究する場所やテーマをラボに一任してくださいさるということ、筆者にとつて大変幸運なことであった。

大学に通って研究に費やさねばならない日が多ければ、休暇を取らざるを得ない日が増えることを意味し、収入が減ることに直結してしまう。それがラボで行った研究や実験結果を認めてくださったので、アフターファイブを有効に使えることになった。

資格取得ブームの昨今では、アフターファイブを使ってさまざまな勉強機会を作り、自己研鑽に励む社会人も多い。こういった風潮からすれば、何でもないようなことに聞こえるかもしれない。しかし、学位という資格の質、あるいは大学の慣習からすれば、このことは実は大変すごいことなのである。

第一に、筆者が学部時代に所属した研究室にも博士コースの大学院生がおられたが、彼らは自らの研究の他に、後進の指導や実習の準備など先生方の補佐役としての役割も仰せつかる。筆者は大学院生として研究室に常駐しないのだから、当

然O教授の研究室の補佐はできない。研究室側から見ると、明らかに戦力外である。

第二に、離れた場所で研究や実験を行うため、教授自身が直接指導や確認する機会が必然的に少なくなるわけだ。つまり、研究の質が確認し難い。したがって、しかるべき指導者の存在やラボのレベルが一定水準以上であることが最低限必要な条件となる。

以上の条件だけ考えても、研究テーマまでドクターKに一任とは:。凄いの一言であった。O教授とドクターKの間には相当厚い信頼関係が存在することを肌で感じた。

学位取得に向けて、極めて恵まれた環境を整えていただいたことに感謝しつつ、第一関門である山口大学連合大学院の入学試験に挑むことになった。

一九九五年初秋のある日。

筆者は山口県湯田温泉にいた。入学試験の受験のためだ。この地は、筆者にとつて不思議と縁のある場所だったのだろうか? 関東育ちの筆者には物理的に遠い場所であったにも関わらず、三度目の訪問だ。

一度目の訪問は、高校の修学旅

行。二度目は、学部六年生の時、初めての獣医学会で発表したのが、こ
こ山口大学であった。

大学院の入学試験科目は、英語、
専門科目、面接だった。専門の科目
は得意だったから、英語を懸命に勉
強して試験に臨んだ。

そして、合格。

仕事と研究。春からは、社会人学
生として二足のわらじを履いた生活
をする。ことが決まった。

産学の架け橋!!

「博士号は研究者のゴールではな
い。スタートだ」学位とは、研究に
自分の哲学（フィロソフィー）を組
み入れられる能力のことだ。他人に
学位を与えることができた時、初め
て自分の学位が本物となる」等々。
学位取得に至るまでのさまざまな
場面でドクターKからいただいた言
葉の数々だ。これらの言葉により、
ある時は精神的に救われたり、自分
を戒めたりしたものだ。要するに、
学位取得という訓練を経ていかに社
会貢献できる能力を身につけるかが
重要であるといった教えた。

ちなみに、博士号を英語の略号で

(注)国立大学における獣医学分野の博
士課程は、北大、東大、大阪府立大はそ
れぞれ単独で設置している。一方、帯
広畜産大、岩手大、東農工大、岐阜大の
四大学で構成される東日本地域の連合
大学院（本部は岐阜大）、ならびに鳥取
大、山口大、鹿児島大、宮崎大の四大学
で構成される西日本地域の連合大学院
（本部は山口大）がある。鳥取大学は西
日本の連合大学院に属するので、本部
である山口大学連合大学院に入学する
ことになる。

表記すると、PhD。この略語を英和
辞典で調べると、*philosophiae doctor*
と紹介されている。Philosophy =
哲学というからもわかるように、ド
クターKは技術習得や研究結果より
も、発想や思考方法といった頭脳の
訓練が重要であると教えて下さった。
学位を取得した現在でも、さま
ざまなディスカッションをすることは
で思考方法を磨き続けていることは
日課の一つである。

昨年、研究成果を将来的に社会に
還元することを視野に入れていな
い、いわゆる「研究のための研究」
と言われる小手先の技術に終始する

ケースが多いと感じる。一般的に
研究室内で行う実験は、研究者自身
が社会還元というテーマも常に意
識して行わないと、実社会の現状や
要求から乖離する傾向が強くなる。
こういった風潮の中で、筆者がニ
ワトリの獣医師を目指し、フィール
ドに飛び込んで来たのだから、「フ
ールド（産業）と学（大学）を橋渡
しするような研究をさせたい」とい
う主旨がドクターKやO教授の一
致した哲学であった。

いざ、二足のわらじを履いた生活
を始めてみると、産と学をつなぐ研
究テーマを模索するのに、最初の数
年間は瞬間に過ぎてしまった。
しかし、現場を見る目が徐々に備わ
ってくると、フィールドには興味深
いテーマが転がっていることに気
がつくようになった。フィールド
で感じる個々の疑問を一つひとつ
解き明かすことが、自分の血肉にな
ることがわかってきた。

紆余曲折はあったが、最終的に筆
者は採卵鶏群におけるサルモネラ
汚染のメカニズムを解明し、博士論
文としてまとめることにした。研
究テーマを選んだキッカケは、社会
的な通説や定説に対する素朴な疑

問から生まれた。

一九九〇年以降に国立感染症研究
所で実施された調査では、わが国で
発生した食中毒患者、鶏卵あるいは
養鶏場の環境から分離された
Salmonella Enteritidis (SE) を疫
学解析した結果、一部のSE菌型は
一九八九年に英国から輸入された種
鶏ヒナから分離されたSEと同一の
遺伝子型であったことが判明したと
いう。この極めて信憑性の高い調査
結果の影響からか？ 識者の間で
は、『ヒトのSE食中毒＝鶏卵＝ヒ
ナが汚染源』という構図が見事にで
きあがっていた。

ヒナが養鶏場におけるサルモネラ
汚染源の一つである可能性を否定す
るわけではないが、少なくとも筆者
のフィールドでは一般的に言われて
いた汚染メカニズムと様相が異なっ
ていた。

「ヒナだけがサルモネラの汚染因
子なのであるのか？」

筆者は素朴な疑問を持った。

幸運にも我々のフィールドでは、
SEどころか他のサルモネラが鶏舎
環境から分離されることがほとんど
なかった。清浄な農場環境下にサル
モネラフリーが確認された初生ヒナ

が導入され、その生涯を通じて毎月のようにサルモネラのチェックがなされる監視体制の下では、サルモネラに汚染したヒナが簡単に農場に入り込むことは考え難い状況であった。ヒナは極めて厳しい監視体制下にある一方、飼料はノーチェックとも言える状態で農場に次々と搬入される現実があった。

そこで農場に搬入される飼料をすべて検査に供してみると、一〜三%程度の割合でSEを含む各血清型のサルモネラが分離されるのではないか！まさに、飼料が養鶏場のサルモネラ汚染源の一つであったのである。さらに詳しく調査してみると、飼料からサルモネラ汚染が発見された後に、鶏舎環境や鶏卵のサルモネラ汚染が続く現象が確認できた。これらの調査結果は極めて貴重な

一 所懸命から一生懸命へ

博士論文の提出締切日まで、あと数週間。筆者は不安定な精神状態で、ある知らせを待ち侘びていた。それは筆者の論文が科学雑誌に掲載されるか否かの知らせであった。

最高峰の科学雑誌と言えば、『ネイ

報告となり得たので、獣医学会での報告や博士論文の基礎となる科学論文として公表することになった。しかし、単純にまとめただけでは我々の目指すフィールドに根付いた研究では完成したとは言えない。早速、筆者らは飼料メーカーや生産者など業界の各方面の方々に集まっていただき、これらのデータをテーマにして活発なディスカッションを行った。飼料メーカーや生産者の方々の真摯な努力や対応の成果であろう。それから一年後には、養鶏場に搬入される飼料のサルモネラ汚染が極めて少なくなったのである。

『研究成果をフィールドに還元してこそ、産と学をつなぐ架け橋となる』とはドクターKの教えであったが、我々が目指した哲学が実を結んだように思えたことは大変嬉しかった。

チャーや『サイエンス』が有名であり、読書の皆様も一度は耳にしたこともあるだろう。これらの有名な科学雑誌の他にも、それぞれの分野にはいろいろな雑誌が存在する。学位取得の条件には、筆者の行った研究

論文のいくつかが、しかるべき科学雑誌に掲載されることが必須である。条件が揃わなければ、博士課程を修了できない。昨年の締切日には間に合わなかった。今年は何とかなってほしいという気持ちで一杯だった。

アクセプト(論文を受諾)。

科学雑誌に掲載されることが決まった連絡がO教授から届いた。アメリカから電子メールで届いたその知らせをO教授は筆者に転送して下さった。直ぐに、自分のことのように心配して下さっていたドクターKに連絡した。

欣喜・欣喜・欣喜!!!

そして安堵感。学位を取得する目処がついた喜びもあったが、むしろ、ある種のプレッシャーから解放された安堵感の方が大きかった。二足のわらじを履いた期間は五年間。この期間、ニワトリの獣医師として歩き始めたばかりだった筆者は、生産現場の方々から信頼を得る難しさを体全体で受け止めていた時期と重なっていたから、精神的に両立する難しさを存分に味わった。

二〇〇〇年度末、学位記を授与。少年だった筆者が真つ暗と感じた世界に、差し込んできたドクターK

というわずかに光る細い糸を見つけた。その光る糸に自分の人生をかけて無我夢中でしがみついた。振り返ってみると、その光る糸は筆者にとつてまさに『蜘蛛の糸(芥川龍之介)』のようだった。当時の筆者にはこの道以外に考えられなかった。

採卵業界に飛び込んでみると、ドクターKをはじめとして、業界からの極めて恵まれた環境に囲まれて、ニワトリの獣医師としての新たなページをめくることができた。感謝という言葉以外には浮かばない。

恩返しという言葉だけでは片付けられないが、これまでの経験、あるいはこれからの経験を生かして、業界や産学のハブ(拠点)として貢献することを自分の人生哲学として、一生をかけてこの天職を究めることができれば、これ以上の幸せはないと感じている。

二年間の連載期間中、ご愛読ありがとうございました。また、誌面でお会いできますことを楽しみにしております。(終)

筆者・(株)ピーピーキューシー

品質管理&生産管理部門長

獣医学博士/獣医師